

---

# Cross Life

神童翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Cross Life

### 【Nコード】

N3778M

### 【作者名】

神童翔

### 【あらすじ】

とある二人の男女を中心とした個性的な仲間による、笑いあり、問題あり、事件あり、涙あり？な、平凡な物語である

## プロローグ

私立光坂高校

長い坂道の両

端に木が道に沿って並んでいる。春にはその木全部が桜に変わり、絶景になる。そんな坂道の上に私立光坂高校はある。

学力はそこそこ、部活は活発で多い（一部の部活に問題があるが、）完全寮制で男子寮と女子寮に別れている。

そんな、高校の

とある二人の男女と個性的な仲間による、笑いあり、問題あり、事件ありな物語である。

4月上旬

私立光坂高校の前の坂道は桜が満開になり、もう軽く散り始めている。今日は春休み最終日、そんな日に桜が舞い散る坂道の前に、一台のタクシーが止まった。

「いやー、ここ

までありがとうございました。」タクシーの後ろ側から出て来た、青年が前の席にいる運転手に声をかける。その青年の右手には少し大きめのバックが握られていた

「ううー、クラクラする、とりあえず、

ありがとうございました」青年の次にタクシーで酔ったのか、気持ち悪そうな女の子が出て来た、その子も少し大きめのバック（青年のよりは小さい）を持っていた

「いえいえ、こちらこそありがとうございました。」笑って運転手はそう言い、タクシーを走らせて、去って行った。二人はそれを見送った

「それにしても、大丈夫か？ さくら」青

年は女の子に尋ねる、酔っていることだろう

「うん、何とか大丈夫、」さくらと言われた女の子はまだ、苦そうな顔を答える　そして、桜に囲まれた坂道に視線を向ける　「うわー！　すごい景色！」

女の子はあまりの光景に大声をだした

それに釣られて後ろを見る、そして青年の視線に坂道が入る　「本当に綺麗だな・・」

青年はそう言つて、バックを強く握つて、

「じゃあ、登るか」　「え？」

青年の言葉に女の子は気の抜けた声を出す

「この坂道登るの!？」　「いや、そうしなきゃ、学校に行けないだろ」　「そうだけど・・・この荷物だよ」　女の子は自分の荷物を青年に見せつける

そんな女の子に青年は溜め息をして、女の子に告げる

「その荷物のせいなのか？」　「そ

れは・・・そうだけど、他にも坂とか・・」　青年はもう一回溜め息をする　「何

か、わざとらしいんだけど、」　「何が？」

青年は女の子に問い詰められる

「その溜め息・・」　「いやー、悪い悪

い、」　変な空気が漂う　そんな中、

「ほら、」

青年は女の子に手を差し出す

「バック、持つてやるから」

「いいの!」　「もちろんいいから、ほら、バ

ック」　女の子は青年にバックを渡す、青年は空いて

る左手で受けとる　「こ

れで大丈夫だろ」　青年の両手は荷物で塞がれた

「うん!ありがとう、“お兄ちゃん”!」

そういい、女の子はウキウキとした気分で坂を登り出す

りペースは遅い

「早

青年も後に続く、荷物が重いのか、女の子よ

く、早く！」

「へいへい」

軽い返事で流す青

年 女の子は軽く、頭を上にして、桜を見る

「それにしてもすごいね、この桜」

「ああ、本当にな」

二人

は歩き出す、この長い坂道を・

## プロローグ（後書き）

この作品は作者、神童とそのCLANNAD好きの仲間で作る、神童のkey作品のトップ3の作品を合わせて、作った作品です。

言葉ミスや文章ミスなどありますが、宜しく願います。  
他にも書いているので、更新が遅くなると思  
います。

感想、アドバイス、  
リクエスト、アイデア、ダメ出し、お待ちしてます！（出来たら、  
リクエストやアイデアを）

## ルームメイト（前書き）

もう一つの小説を書いたり、学校の宿題に追われて更新が遅くなりました。 スローペースだと思いますが、頑張っていきたいと思っています。

では、どうぞ

.

## ルームメイト

「失礼します。」

あのあとは荷物とかで大変だったが、なんとか坂を登りきった、(だけど、俺よりもさくらの方が疲れていたが)

そして、やっと学校にたどり着いたのだが、まだやるべきことがあった、

「今日から寮に入ることになった、三年の並咲<sup>なみさき</sup>光<sup>こう</sup>です。」

「あつ、えーと・・・二年の並咲さくらです。」

寮に入るの手続きだ、明日からこの学校に転校するなったので寮に入ることになったのだ

「君達が今日から寮に入る、並咲君達だね、」

そこにいたのは明らかに光と同じぐらいの女性だった

この学校は三年生が基本的に寮長をやるのだった  
その寮長は少し豪華そうな机のところに座っていた

「君達の荷物ならもう部屋に運んであるよ、」

「わかりました、ありがとうございます」 「私は君

と同じ学年だから、別に敬語じゃなくていいよ」

「あつ、ごめん、」 「別にいいよ。」 そして、

寮長は机の上からなにかを探し始めたが、なかったのか、動きを止めた、

「やん、あれはない？」 「これですか？ あー

ちゃん先輩。」 光は声のした方に視線を向けた、そ

こにはファイルを片手に持っている、髪をビードマが付いたゴムで止めていて、左腕に『風紀委員長』と記されたワッペンを付けてい

た、女の子がいた その子が持っていたフ

ァイルを寮長は受け取った 「ありが

とう、かなちゃん。」 だが、その子は反応し

なかった そして、それが当たり前のようにスル

ーして、寮長は話す

「えーと、光君は 室で、さくらちゃんは 室だね。」

寮長はファイルを見ながら話す、

「ありゃ？」 寮長から問

抜けた声が漏れた

「どうしたんだ（ですか）？」 二人は絶妙

なタイミングでハモツた、 「いやー、なんでもない」

寮長は笑みを浮かべながら答えた

「そうか、ならいいや」 「そう、なんでもない、あ

と光君は男子寮にさくらちゃんは女子寮ね」 少し違和感が

ある喋り方で寮長は言った

「わかった、ありがとな。」 「ありがとう

ございました！」そう言つて、寮長室を出た、

寮長は少し笑みを浮かべて、ファイ

ルを眺めていた 「あーちゃん先輩、ど

うしたんですか？ 少し不気味ですよ？」 寮長の笑

みについて、『かなちゃん』と言われた女の子は寮長に問う

「ごめんごめん、ちよつとね〜」

寮長は女の子を見て、言ったあと、またファイル

に視線を戻す、 そこには光とさくらの部屋の同居人

の名前が記されていた それは……

## 《光》

あの後は、少し不安を抱きながら、 さくらと別れ、自分の部屋と向かった

俺の部屋は二人部屋で俺の他に同居人がいるわけだが、どんな奴 だろ？とか考えながら部屋に着いた

右手にある荷物を置き、目の前にあるドアの前に立つ、緊張なの か、疲れたのかはわからないが、手から少し汗が出ていた、

そんな中、前にあるドアをノックした、

ガチャ、ドアが開いた。

出てきたのは、健康的に普通の背丈に茶色の髪の男だった

「お!? あんたがこの部

屋の同居人かい？」

男は友好的な喋りで聞いていた

「ああ、そうだ。俺は並

咲 光だ、よろしくな、」そう言って、手を差し出す

「俺は棗 恭介だ、こちらこそよろしく。」

棗も手を差し出し、握手した

### 《さくら》

両手で重たい荷物を持って歩く、自分で言うのも変  
だけど、少し危ない気がする。

普通ならこんな大荷物なんか一人では無理なんだけど、  
お兄ちゃんにも頼ってばかりだったから、今回は私が頑張るんだ、  
でも重い！ 私に

とってはノーベル賞もの頑張りもあって、やっと部屋にたどり着い  
た。  
(この扉の向こうに私の部屋と

ルームメイトがいるんだ。)

期待と希望を胸にして、さくらの右手が扉に動く、

バンッ！、ノック

せずに扉を少し強めに開いた。そこ

には女の子が一人いたが、こっちを向いて呆然としていた、普通な  
らそうだ突然、自分のプライベートルームの部屋に突然入ってきた  
のだから・・・ 「初めまして！ この部屋のルー

ムメイトになった並咲 さくらです！ よろしくお願いします！」

さくらは元気よく挨拶したが、相

手はまだ固まったままだ、

「えーと、どうしたんですか？」

さくらは自分やった行動の不自然さに気づいて  
いない、 「え？

だって……」

やっと女の子は自分

の口を動かしたが、まださくらがやった異常な行動にびっくりしていたのか、うまく言葉を発していなかった、

そして、さくらの『もう一つの異常』を指摘する

「並咲さん、……」

私のルームメイトはもう居るんだけど……」

「え!？」

さくらは相手の言葉を理解するのに時間がかかった

(ルームメイトがいる?　すでに二人居る、じゃ

あ私は?)

さくらは

今だによく状況をわかっていなかった、　つまり……

「並咲さん、部屋間違っていると思

う」　　と言うことだった……

さくらは突然顔を赤くして、

「間違えた?……」

・すっ、すみませんでした!!」

そう言って素早く、ドアを閉めた。

(はあ、どうしよう、部屋間違えたし、

部屋わからないし、もうどうしたら、)

さくらは荷物を持って歩き出す、

(やっぱり、一人じゃダメなのかな?　私はやっぱり

お兄ちゃんが居ないと何も……)

突然、さくら

の思考が途切れた、

ばすっ、さくらの肩に何かあたったから

だ、　　え?　　と思っつてその方向を

見る、そこにはさくらより小柄な女の子がいた、倒れてはいなかつ

たけど、あたったのは事実だ、だから……

「すみません、……はあ、」

さくらは謝ったが、この先

のことを考えるとため息が出ってしまった

「あつ、いえ、気にしないで、それよりどうかしたの？」  
小柄な女の子は心配そうな顔で言う、

「まあ、その、……」  
「部屋がわからなくて……」  
「部屋がわからない？」  
さくらは部屋がわからな

いということが恥ずかしくて、言葉が途切れた、

「そう、それは大変ね、なんで、部屋がわからなくなつたの？」  
「いえ、今

日から寮に引越して来たんですけど、寮長から部屋を聞いて来たのですが……忘れちゃって……」

さくらはまた顔を赤くする

「なら、仕方ないわね、じゃあ貴女が並咲さんね、」

「はっ、はい！ えーとなんで私の名前を……」

「それは私が生徒会で報告を受けたから、」

「えっ？ 生徒会の方なんで」

「すか？」  
さくらが問い掛

けると、女の子は首を軽く立てに振った

「へえー、そうなんですか、」

「あと、並咲さんの部屋につ

いても報告を受けてるわ、」

「えっ？ じゃあ、」

ええ、並咲さんの部屋に私が案内するわ」

「やっぱり……じゃなかった、お願いします。」

そう言って、さくらは深く頭を下げた

あれからはほん  
の数分で部屋に着いた、

「ここが並咲さんの部屋よ、……」

女の子はさくらの部屋に案内したが、少し苦そうな顔をしていた、と思う、  
仮定なのは、その子がさっきから、あんま

り表情を変えていなかったからで、もしかしたら気のせいだと思う  
「ありがとうございました！」

「さ  
くらはお礼を言っ、部屋に入ろうとしたが、もう一度女の子を見た、  
最後に貴女の名前を教えた、」

「私の？」

案内を終えた女の子は部屋に戻  
ろうとしていたのか、さくらに背を向けていたが、振り返って、言  
う  
「そう貴女の名前、」

「私は立華 奏、二年生で生徒会副会長。」

立華はそう言っ、去っていった、

（奏ちゃんかあ、あの子私  
と同じ二年生なんだ、）  
そんなことを

考えながら、またノックをせず、ドアを開く

その部屋はベットが二つあって、部屋の奥に机が二つあったが、そ  
の片方に女の子が座っ、こっちを振り返っていた、女の子は背は  
平均的で頭にカチューシャみたいなのを付けていた

「初めまして、並咲 さくらです。今日からよろしく  
お願いします！」  
さくらは頭を

下げる、 それに対して、女の子は立ち上がっ、さくらの近く  
まで歩いてきた  
「貴女が今日

からルームメイトの並咲さんね、私は中村 ゆりよ。よろしく、」  
「はい！ よ

ろしくお願いします！」

これが二人の

寮に入った初日の話、そして、これが二人の騒がしい生活の始まり  
だった。

## ルームメイト（後書き）

なんか立華の喋り方がなんか変ですみません。

立華は本編で

は生徒会長ですが、この話では副会長にしました。

えっ？ 生徒会長は誰か？それはあの昔は伝説の不良だったあの人です（笑）。

学校の設定ですが、三つの

作品の所々を組み合わせた学校です。

詳しくは、学

校の前の桜並木と旧校舎と学校名はCLANNADから取りました。

学校の校舎と寮とかの多くはリトルバスターズ！で、食堂がA

ngel Beats！です。

なんか無理

矢理過ぎると思いますが、学校設定は以上です。

次の更新は遅いと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3778m/>

---

Cross Life

2010年10月8日10時30分発行